

融合する文化～沖縄の古民家に見られる東アジアの知恵～

Nakamura\_House

# 中村家住宅

沖縄県北中城村

日本本土のはるか南西、東シナ海に位置する沖縄は、古くから日本だけでなく中国とも深い関わりがありました。このため、伝統的な住まいには両国の影響が見られます。また、厳しい暑さや台風といった亜熱帯気候に耐える工夫にも特徴があり、沖縄ならではの建築様式が育まれました。中村家住宅は18世紀中頃に建てられた豪農の屋敷で、1972(昭和47)年の沖縄本土復帰と同時に国の重要文化財に指定されています。



高さ2mを超える石垣。門扉はなく、奥に顔隠し塀(ヒンブン)を設けて母屋を見通せないようにしている。  
1889(明治22)年以降、琉球王国時代の制限令が解かれ、赤瓦の利用が農民に許された。赤瓦に含まれた雨水は、屋根の温度を下げながら気化する



一般的には建物の南と東に庇のような雨端(アマハジ)を設け、雨と日差しを遮る。建物外周の腰下部材の腐食を抑える効果もある



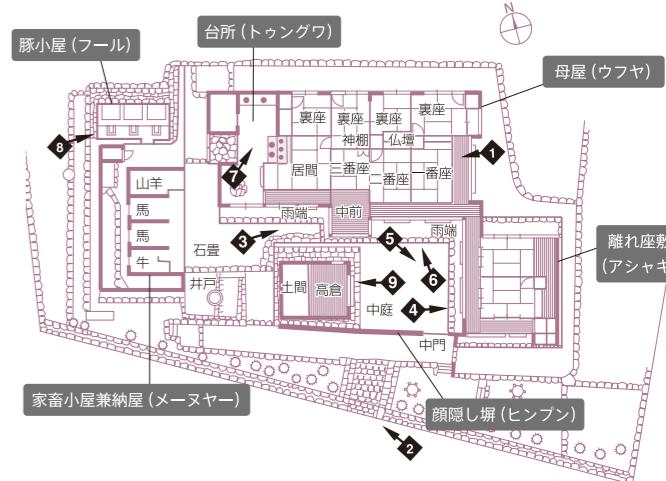
かまどの奥に家を守る神、火の神(ヒヌカノ)が祭られている。もとは極楽浄土(ニライカナイ)を巡洋していたが、中国の道教のかまど神と融合し固有の信仰となった。竹が葺かれた屋根に、息道(イーチミー)と呼ばれる通気孔が見える。屋根裏は薪や食料の貯蔵場所として利用した



敷地の北西に作られた豚の飼育所。石囲いの手前に人間の便所があり、排泄物が豚の飼料になる仕組みだった



① 南と東の開口部は広く、風が家を通り抜ける。手前が一番座。続く二番座は先祖の位牌をまつる、いわば仏間。先祖崇拜を重んじる沖縄では仏間を家の中心に置く



屋敷の東・西・南は石垣で囲み、北は自然の斜面によって台風の返しなどの北風を防ぐ。石垣はサンゴの化石を含む琉球石灰岩で柔らかな風合い。多孔質であるため、大理石などに比べて表面温度が上がりにくい特性を持つ。南に見える防風林のフクギは樹齢300年ほど

**中** 村家住宅の母屋と離れ座敷は、1750年頃、3代目・まつ村渠(ナカンドカリ)が首里から士族の住まいを購入、移築したものといわれています。

当時の琉球王国では、建築の際に中国の風水(ファンシー)を重要視しました。中村家でも南向き緩斜面の北側を掘り下げて敷地を拓いていること、建物正面が南から西へ15度ずれた方角に向いていること、首里の役人を泊めるための離れ座敷や客間(一番座)を良い方角とされる南東に配置していることなど、随所に風水の考えを取り入れています。

一方、建築形式は日本本土の木造建築の流れをくんでいます。沖縄で貫木屋(ヌチヂヤー)と呼ばれる形式は、寺社建築などにみられるもので構造部材にほとんどくぎを使用しないのが特徴の一つ。屋根の反りも影響を受けているといわれます。

貫木屋以前の住まいは掘建て小屋のような簡素な造りでしたが、貫木屋になり、天候に対する工夫も多様化します。漆喰で固めた赤瓦屋根や、敷地の3方を囲む琉球石灰岩の頑丈な石垣は台風への備え。ことに南側にはフクギも植えられて、台風がもたらす南東からの暴風雨を防いでいます。屋根は底のように長く「雨端」

【首里】琉球王国時代の政治・経済の中心地  
〔風水〕地氣・地勢・陰陽  
〔墓地〕都城・住宅・墳墓の地を定める術

■開館時間：午前9時～午後5時30分

■休館日：年中無休

■入館料：大人500円、中学・高校生300円、小学生200円

\*団体は20名様から適用(通常料金の10%引き)

\*身障者の方は通常料金から20%引き(要、身障者手帳提示)

\*ボランティアガイドは要、事前予約

詳しくはホームページへ：<http://www4.ocn.ne.jp/~knaka/>